

物語解釈能力の尺度開発

～主観的幸福度や批判的思考との相関～

1190535 藤原 佑貴

高知工科大学経済・マネジメント学群

1. 概要

文章を使った物語の研究しているはまだ少なく、ほかの分野に比べれば歴史は浅いだろう。既存の物語研究は読者の感情の喚起やその変化が主な研究の対象となっている印象を受けた。そこで読者の体験や感情の作用ではなく、人々がどの程度物語を理解し、どのように物語を解釈しているかについて関心を持ち、その指標はまだ存在していないのではないかと考え、自身でそれらを測れるような物語解釈能力の尺度を開発したいと考えた。それを質問紙実験によって調査する。また、それがどのようなものと相関があるのかを実験を通して解明する。ここで筆者は物語解釈能力が高い人ほど主観的幸福尺度や批判的思考態度尺度が高くなり相関があるのではないかと考え、これを主な仮説とした。実験は高知工科大学の学生43名を被験者の対象に行い、得られたデータを集計し、分析した。結果は物語解釈能力と主観的幸福尺度は相関しなかったが、批判的思考態度尺度の中の「論理的思考への自覚」の項目よりも「探求心」の項目に強い相関がみられた。

2. 序論

現代の日本では、インターネットや電子媒体が発達し、新聞や書籍などの紙媒体の識字率が低下している傾向にあり、特に若者の活字離れが社会問題となっている。普遍的でかつ信頼性のある物語解釈能力の尺度を開発することができれば、文章や物語を読む重要性が社会に広く認知され、現代の日本で社会問題になっている識字率の低下や活字離れを防ぐことも可能ではないだろうか。しかし、物語解釈能力の尺度を開発すると述べたものの、これだけでは学校教育の国語のテストと差別化できず、同じものを測ってしまうのではないかと問題が生じた。

これを解消するために物語解釈能力の中でも、伏線と帰結に気付いているかを重視することにした。ある伏線と帰結に気付けるということは物語の中で一見すると関係がない

ような場面や出来事同士をつなぎ合わせ、それに意味を持たせることができる能力だとここでは定義する。人々の人生に置き換えたとき、過去の出来事を伏線と捉え、多くのことに気付ける人ほど物語解釈能力が高くなり自分の人生を物語として考えられ、よりよく生きることにつながるのではないかと筆者は考えた。よって一つ目の仮説は、伏線に重点を置いた物語解釈能力が高い人ほど主観的幸福度が高くなるとした。また、物語解釈は各人の人生経験や感情・思考が強く反映されるため、批判的思考態度尺度とも相関するのではないかと考え、これを二つ目の仮説とした。

物語解釈能力は、エドガー・アラン・ポーの推理小説「盗まれた手紙」の文章を引用し、短く改変したものを題材として使用する。ここで物語のあらすじを説明する。物語は

「宮殿で起こった出来事で、とある貴婦人が自室で私的な手紙を読んでいるときに、ちょうどその手紙の内容を知られたくない男性が入ってきてしまった。テーブルの上に置いて特に指摘もされず誤魔化していたところ、さらに大臣が入ってきて業務報告を終えた後、その手紙とよく似た手紙を取り出しテーブルに置いた。そして部屋を出る際に大臣は自分ではなく貴婦人の手紙をまんまと盗んでいった。その件以来、大臣は貴婦人の弱みを握り、政治的権力を握るようになった。困った貴婦人は警察に手紙を取り返すよう依頼するが、警察は大臣の部屋を隅々まで探しても見つからないと言う。その事件のあらましを聞いた探偵デュパンが事件を鮮やかに解決する。」

という内容になる。それを被験者に読んでもらい、その題

材に関する問題をいくつか自身で用意し、解いてもらうことで物語解釈能力を測る。題材をそっくりそのまま使うと文章量が多くなり、時間が長くなりすぎてしまうため、自身で文章を簡潔にしたり、短くして問題と整合するように変更した。このように物語解釈能力を測る準備をして実験を行い、仮説を検証する。

3. 目的

本研究の目的は、さまざまな分野で使われるような物語解釈能力の尺度を開発を目指し、主観的幸福尺度や批判的態度尺度との相関関係を主に検証する。また物語解釈能力と読書量や読んでいる作家との関係性も明らかにする。

4. 実験方法

高知工科大学の学生 43 名を被験者の対象に質問紙実験を行った。伏線と帰結を重視した物語解釈能力であるため、エドガー・アラン・ポーの推理小説「盗まれた手紙」が物語の題材として望ましいと考え選定した。その文章を短くし、手を加えたものを 15 分間熟読してもらい、それに関する問題を選択形式と記述形式それぞれに解答していただいた。選択形式は、物語中の疑問点や自由解釈の余地がある事柄についてどの程度気にかけたかを

- | | |
|----|------------|
| 1. | まったく気になかった |
| 2. | 少ししか気になかった |
| 3. | 気にかけた |
| 4. | 強く気にかけた |

の 4 段階に設定し、全 10 問とした。なお、解答時間は 15 分以内としその際に物語文の資料を裏返しにして再読しないように指示をした。記述形式では、基本的な文章の読解力や多様な自由解釈、伏線と帰結に気付いているかを測るための設問を全 7 問用意し、記述していただいた。解答時間は 30 分以内とし、その際に任意で物語を再読できるようにした。以上が物語解釈能力にあたる。

次に、被験者の年間読書冊数や有名な古典文学作家を恣意的に 20 名程度リストアップし、どの作家の本を読んでいるかについて調べた。読んでいない作家が記載されていない場

合、「その他」の項目を設け、具体的な作家名を空欄に記述していただいた。最後に、主観的幸福尺度と批判的思考態度尺度に回答してもらい質問紙実験を終了した（楠見 2004, Nakagawa 2015, Lyubomirsky and Lepper 1999, Lyubomirsky et al. 2005, Lyubomirsky and Ross 1997, Asadullah et al. 2018)。後日、得られたデータを Microsoft Office Excel 2016 に集計し、分析した。

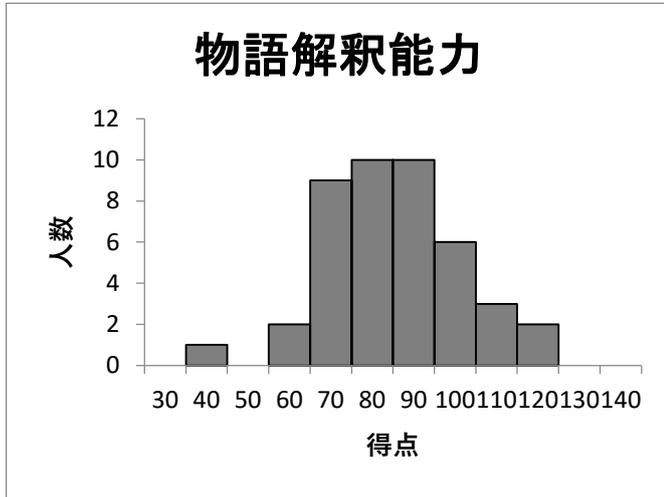
次に物語解釈能力の採点基準について説明する。選択と記述どちらも①基本的な読解力、②多様な解釈、③伏線と帰結の 3 つの軸をもとに問題を作成し、後者にいくほど配点が高くなるように設定した。選択は全 10 問であり、①に関する設問を 3 問（パート A1 とする）、②に関する設問を 5 問（パート B1 とする）、③に関する設問を 2 問（パート C とする）と内訳を決定した。パート A の配点では「1. まったく気になかった」が 0 点、「2. 少ししか気になかった」が 1 点、「3. 気にかけた」が 2 点、「4. 強く気にかけた」が 3 点となっている。先に述べたように、問題が先に進むにつれて配点が高くなるように設定したので、パート B1 はパート A1 の 2 倍、パート C はパート A1 の 3 倍の得点が付与される。いずれにしても「1. まったく気になかった」を選んだ場合は得点がつかない仕組みになっている。以上の説明より、選択形式は 57 点満点となる。

一方記述は、全 7 問で①に関する設問を 3 問（パート A2）、②に関する設問を 4 問（パート B2）とした。質問文に反した解答をしている場合や、文脈を捉えられておらず、物語の流れを理解できていない。解答が物語と矛盾しているなどのものは、×になり 0 点。内容は間違っていないが物語の本筋から沿れていると筆者が判断したもの、抽象的な解答または説明不足であるもの、題材の性質上読み手がミスリードしているが物語の構造が成り立っている解答は、△になりパート A2 では 5 点、パート B2 では 10 点。物語の基本的な読解ができており、説明が十分であること、ある箇所と関連づけた自由解釈ができていないこと。伏線と帰結に気付きそれを説明できているものは、○になり、パート A2 では 10 点、パート B2 では 15 点が得点として加算される。以上の説明より、記述形式は 95 点満点となり、選択形式と合算して 152 点満点の物語解釈能力となった。

6. 実験結果

被験者 43 名の物語解釈能力のデータを集計し、点数化した結果が以下のヒストグラムで表すことができる。

図 1：物語解釈能力のヒストグラム



	パート A 1	パート B 1	パート C	パート A 2	パート B 2
vs sv	0.287	-0.011	0.083	0.050	-0.004
vs swls	0.369	0.102	0.112	0.013	-0.020
vs CT パート A	0.105	0.112	0.152	-0.127	0.087
vs CT パート B	0.307	0.400	0.092	0.077	0.291

物語解釈能力のヒストグラムを見ると、特にどちらか一方に偏りもなく正規分布に近い形をしているので、作成した問題の難易度が適切だったことがわかる。最低点が 49 点、最高点が 125 点、平均点が 90 点、中央値が 89 点となった。まず物語解釈能力の総合計と 2 つの主観的幸福尺度との相関係数を出していく。以下、主観的幸福尺度の一つ目を SV、二つ目を LWLS と呼ぶことにする。結果は、SV との相関係数は 0.063、SWLS は 0.097 となり、と相関は見られなかった。よって伏線に重点を置いた物語解釈能力が高い人ほど、主観的幸福度が高くなるという一つ目の仮説は支持されなかった。

次に物語解釈能力の総合計と批判的思考態度尺度の 2 つの要素をそれぞれに分けて、相関係数を出していく。以下、批判的思考態度尺度の一つ目を CT パート A、二つ目を CT パート B と呼ぶことにする。結果は、CT パート A との相関係数は 0.101、CT パート B は 0.388 となり、CT パート A の「論理的思考への自覚」とは相関は見られなかったが、CT

パート B の「探求心」と相関があることが明らかとなった。

続いて物語解釈能力を各 5 つのパートに分けてそれらを一つずつ主観的幸福尺度と批判的態尺度と相関をとったものが以下の表になる。

各パートによって大きなばらつきがあることが判明した。次に物語解釈能力の総合計と漫画や雑誌、ライトノベルを除いた年間読書冊数の相関係数を出していく。結果は、0.232 となりあまり相関はみられなかった。にもかかわらず、筆者が恣意的に選んだ古典文学作家の読んだ経験があるかについての質問は、読んだ経験がある人 14 名の物語解釈能力の平均点が 99 点であり、そうでない人 29 名の平均点である 85 点よりも 14 点高くなっていることが判明した。最後にこの題材の文章を読んだ経験があるかについても加えて質問したが、読んだ経験があるのは 1 人だったのであまり影響がないものと思われる。

7. 結論

主観的幸福度との相関がみられなかった原因として考えられるのは、筆者のミスにより伏線と帰結に気付いているかの問題が十分に用意できなかったため、研究の主旨、仮説から逸脱してしまった点、物語解釈能力の中で伏線と帰結よりも基本的な文章理解及び読解力、自由解釈の配点の割合が高くなってしまった点が挙げられる。表にある選択形式のパート A 1 をみるとどちらの主観的幸福度も 0.287、0.369 とどちらかといえば、高い相関がみられる。しかしながら基本的な読解力と主観的幸福度のつながりが特に考えられないため、これはパート A 1 全体の得点率が高いことが原因であると予測し影響がないと判断した。

次に批判的態尺度の「探求心」がなぜ相関したのかについて考える。物語解釈能力の選択形式が筆者が提示した疑問・事柄についてどの程度気にかけてきたかの質問であるため、物語中の文章をより深く知りたいと思う「探求心」が

強いほどより多くのことに気づき、気にかけることの数や程度が増えるのだと解釈した。物語解釈能力の記述部分であるパート A2 やパート B2 と CT パート B の相関はそれぞれ 0.077、0.291 となっており、他の尺度に比べて相対的に高くなっていることがわかる。記述は選択のようにどれに当てはまるかを選ぶだけにはいかず、能動的に自らの言葉で解答しなければならない。「探求心」が強いからこそ多くのことに気づき、それだけ長く文章を空欄に書くことが可能である点、人に上手く伝える説明ができる点が得点を高くさせる要因であると考えた。

また物語解釈能力が年間読書冊数とは相関しなかったが、歴史的に価値があるとされている古典文学作家を読んでいる人ほどそうでない人に比して平均点が高かった。これは物語に造詣が深い人物が必ずしも量的にたくさんの小説を読んでいるわけではなく、長い年月を経ても、現代に読み継がれるような文学的価値のある文章や物語に触れている傾向があるということを表しているのではないだろうか。最後に、物語解釈能力を自身で開発するのは非常に挑戦的であったがそれにあたって重要だと感じたのは、一人で研究をするのではなく、その物語を深く理解している複数人が意見を持ち寄ってそれを共有することが、問題の質をより高めることに成功をもたらし、素晴らしい研究となるのではないだろうか。

物語解釈能力の尺度開発がこれから進展し、それが人々の日常を豊かにさせるものとなることを期待したい。

参考文献

- Nakagawa, Y., (2015) Effect of critical thinking disposition on household earthquake preparedness. *Natural Hazards* 81: 807–828.
- Lyubomirsky, S., and Lepper, H. (1999) A measure of subjective happiness: preliminary reliability and construct validation *Social Indicators Research* 46: 137–155.
- Lyubomirsky, S., Sheldon, K., and Schkade, D. (2005) Pursuing Happiness: The Architecture of Sustainable Change *Review of general psychology* 9: 111-131.
- Lyubomirsky, S., and Ross, L. (1997) Hedonic consequences of social comparison: a contrast of happy and unhappy people. *Journal of personality and social psychology*, 73: 1141.
- Subjective well-being in China, 2005–2010: The role of

relative income, gender, and location. *China Economic Review* 48: 83-101.

- Zhao, Y., Yu, F., Jing, B., Hu, X., Luo, A., & Peng, K. (2018) An analysis of well-being determinants at the city level in China using big data. *Social Indicators Research* 1-22.